八市立博物館未来の森ミュージアム常設展示【信仰のかたちⅡ】 解説シート

八代城主・松井家の祈祷寺（きとうじ）

金立院（こんりゅういん）の歴史（れきし）と仏像（ぶつぞう）

令和元年(2019) 8月6日(火)～10月14日(月・祝)

金立院（こんりゅういん）の歴史

八代市本町（やつしろ　ほんまち）1丁目にある金立院は、江戸時代から続く歴史ある寺院です。伝来（でんらい）の由緒（ゆいしょ）によると、もともと金立院は江戸時代の初めに豊前小倉（ぶぜんこくら）（現北九州市）に創建（そうけん）された真言宗（しんごんしゅう）寺院で、初代の幽海（ゆうかい）が細川家筆頭家老（ほそかわけひっとうかろう）である松井興長（まついおきなが）の祈祷師（きとうし）をつとめました。

寛永（かんえい）9年（1632）細川家の肥後入国（ひごにゅうごく）に伴い、金立院も松井家の熊本二の丸屋敷（やしき）に移転します。そして、正保（しょうほう）3年（1646）松井興長が八代城に入城したことで、金立院も八代城下町に移転。その後も、八代の真言山伏（やまぶし）の中心寺院、松井家代々の祈祷寺（きとうじ）として存続しました。

この展示では、現在も金立院に伝わる貴重な古文書（こもんじょ）や仏像を紹介します。小さな展示ですが、金立院および八代ならではの歴史、そして仏像の魅力を感じていただければ幸いです。(解説＝鳥津)

金立院

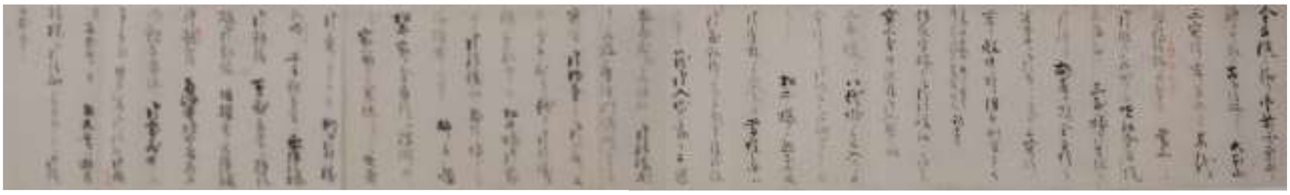
古文書（こもんじょ）が語る金立院の歴史と仏像

金立院由緒控（こんりゅういんゆいしょひかえ）

紙本墨書　切継紙 / 縦 15.6 ㎝　横 244.8 ㎝ / 明治 27 年(1894)3 月　/金立院所蔵

この古文書は明治 ２７年（1894）に書かれたもので、金立院の歴史と由緒（ゆいしょ）が記されています。正保（しょうほう）３年(1646)松井興長（おきなが）の八代城入城（にゅうじょう）と共に現在地へ移りました。この古文書によれば、金立院は創建（そうけん）以来、松井家の祈祷所（きとうしょ）であり、松井家と栄枯盛衰（えいこせいすい）を共にする間柄の寺院であると記されています。

注目すべきは、伝来する仏像の種類と由緒が記されていることで、ここに紹介する「千手観音（せんじゅかんのん）」は松井寄之（よりゆき）、「弁才天（べんざいてん）」は松井寿之（ひさゆき）ゆかりの像だと記されています。この古文書は、松井家と金立院の深い歴史のみならず、伝来する仏像の由緒までもがわかる貴重なものなのです。(解説＝萱野)



金立院由緒(部分)　　釈文(原文のまま)と意訳(現代語訳)　　(釈文・意訳＝笠井)

金立院之儀は豊前国栗原之
池と申処ノ古き院跡ニテ　大本山
三寶院ノ宮ノ直末ニシテ累代
触頭院格ニ御座候、当所ニ
御供被罷越申候先祖金立院
幽海儀ハ　三斎様御有縁之
御侍ニテ、故有て（其訳略ス）金立院之
養子ニ御遣しニ相成、三寶院ノ
宮ノ殿中ニ於て得度剃髪被申候、
（其節得度執行ニ預ハリシ袈裟衣ト、ロトヲ一箱ニ入、鎮守稲荷社中ニ現存ス）訳有て
佐渡守様の御祈祷師ニ被附置候、
寛永年中肥後御入国之砌、
三斎様ニハ八代城ニ被為入候ニ付、
寺院マても御供被罷越者多分
有之候、　松井様ニハ熊本ニ之丸
御屋敷ニ被為入候ニ付、当院之儀ハ
御屋敷内ニ被為召置、其後正保
三年八代御入城之節被召連、
尚屋敷を被為拝領、御祈祷所ハ
申ニ不及、庫裡門塀廻り等まて
悉皆御作事ニて御取居エニ相
成、今日ニ到まて代々御祈祷
師相勤居申候、松井様御家
付之御祈祷所ハ当院ニ限り申候
儀、確実ニ御座候、故ニ乍憚
松井家ト金立院トハ浮沈ヲ共ニ
スル家筋之御関係アリト迄、先年
御意も有之申候、則御祈祷
所内　千手観音尊ハ要津院様
御勧請　聖観音尊ハ顕功院
様御勧請　准提尊ハ真徳院様
御預け　南海普陀山唐呉子
作観音尊像ハ御宝蔵中ニ
有候処、旦夕為御祈願御勧請ニ
相成居申候　弁天尊ハ邀月
院様御信仰被為在居申候を御預け
相成居申候、
（以下略）

【末尾】
明治廿七年午三月　　金立院

【意訳】

もともと金立院は豊前国（現在の北九州市付近）栗原池というところにあった古い寺です。大本山三宝院（京都醍醐寺の子院）に所属する寺院で、昔から触頭（地域の核となる寺院）の役割を務めました。先祖の幽海はもともと細川三斎（忠興）様と縁のあった武士で、金立院の養子となり、三宝院で出家した後、松井興長様の御祈祷師となりました。

寛永期、細川家が肥後に御入国のとき、三斎様が八代城に御入城されたことによって、八代へ移転した寺院がたくさんありました。松井様は熊本の二の丸御屋敷に入られたので、金立院はその屋敷の中に移りました。

その後、正保三年（一六四六）興長様が八代城に御入城のとき、金立院も八代に移りました、屋敷・御祈祷所はもちろん、住職の住居・門・塀などまで建てていただきました。

それ以来、明治の今日に到るまで、代々松井家の御祈祷師を勤めさせていただいております。松井家専属の御祈祷所は金立院だけだということは確実でございます。恐れ多いことですが、「松井家と金立院とは栄枯盛衰を共にする関係だ」と、先年松井家から御言葉をいただいています。

金立院の中にある千手観音像は要津院（松井寄之）様が御勧請、聖観音像は顕功院（松井徴之）様が御勧請、准提観音像は真徳院（松井章之）様が御預け、中国南海普陀山の唐呉道子作の観音像は御宝蔵の中にあります。弁財天像は邀月院（松井寿之）様が御信仰されていたものを当院に御預けになったものです。

（以下略）

松井寄之（まついよりゆき）（1616～1666）ゆかりの仏像（ぶつぞう）

木造千手観音菩薩坐像（もくぞうせんじゅかんのんぼさつざぞう）

桧材ヵ　寄木造　玉眼　衣は漆箔　像肌は金泥塗 / 総高 88.8 ㎝　像高 36.3 ㎝ / 江戸時代 / 金立院所蔵

千手観音は千の手と目を備え、その手と目の及ぶ範囲は広大で無量（むりょう）であるとされています。本像は合掌（がっしょう）する手の他に 40 本の手を持ち、1 本の手で 25 の世界の衆生（しゅじょう）（生きものすべて）を救済（きゅうさい）するため、25 に 40 を乗（じょう）じて千手としたと経典ではいわれています。

本像は、真言宗（しんごんしゅう）として創建（そうけん）された金立院の本尊（ほんぞん）として祀（まつ）られているものです。真言宗は、縁（えん）ある仏（ほとけ）を自由に本尊（ほんぞん）として信仰できることを特徴とし、金立院では古来より人気のある千手観音を本尊として祀ったと思われます。

本像は、台座（だいざ）の華（はな）やかさから江戸時代の制作とわかります。起伏（きふく）のある口元（くちもと）や頬（ほお）、彫（ほ）りの深い衣文線（えもんせん）など、優れた写実（しゃじつ）表現は鎌倉彫刻（かまくらちょうこく）の美意識（びいしき）を受け継いでおり、非常に精錬（せいれん）された仏像だといえます。

本像のような美しい仏像は、都の腕のある仏師によって造られたと思われます。古文書に書かれているように、松井家三代寄之（よりゆき）ゆかりのものとすれば、金立院にこのような精錬されたつくりの美しい仏像が祀られていることもうなずけます。

松井家３代目！

松井寄之（まついよりゆき）（1616～1666）【要津院（ようしんいん）】

元和 2 年 (1616) 細川忠興の六男として生まれ、
元和 7 年 (1621)、松井興長の養子となる。
寛永 11 年 (1634) から家老として藩政に従事。
寛文元年 (1661) 家督相続し、八代城主となる。

(解説＝増村、金田　撮影＝石原)

松井寿之（1668～1745）ゆかりの仏像

木造弁才天坐像

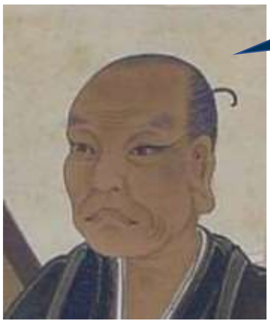
桧材　寄木造　玉眼　彩色 / 総高97.9㎝　像高49.6㎝ / 江戸時代 / 金立院所蔵

「如来」「菩薩」「明王」「天」という種類のなかでも、「天」は仏法を護る役割を担っています。その多くは仏教に帰依したインドの神々で、弁才天もインドの河の女神でした。

日本では、七福神のひとつとして琵琶を奏でる姿で親しまれていますが、本像は８本の腕に武器や宝珠を持っています。頭頂部には福神である宇賀神と鳥居を戴き、その結びつきが財宝神としての性格を強調しているといわれています。また、本像は亀蛇に乗っているのが特徴です。

本像は表情や体形が美しく都仏師の作だと思われます。一方亀蛇は表現が素朴であることから、後に地元の仏師が造って合体させたと推察されます。亀蛇は妙見祭で馴染み深く、古来より八代で盛んな妙見信仰に関係しています。

江戸時代までは神様と仏様が同じという考え方（本地垂迹説）があり、八代神社ゆかりの仏像の中には亀蛇に乗った阿弥陀如来の例があります。本像は弁才天を妙見神と同一視し信仰していた可能性を示す興味深い像です。（解説＝森、大野　撮影＝石原）



私が５代目です！

松井寿之（1668～1745）【遨月院】

寛文８年(1668)に生まれる。
元禄５年(1692)家督相続し、八代城主となる。
和歌や茶の湯をよくたしなみ、
松井文庫に書や和歌が残る。

この展示は、八代市立博物館未来の森ミュージアムと令和元年度博物館学芸員実習生との共同企画で、鳥津亮二学芸係長と石原浩学芸員監修のもと、企画・展示および作品解説の執筆を大野明花（八洲学園大学）、笠井英和（熊本大学）、萱野優（崇城大学）、金田紗弥（崇城大学）、増村光星（東京農業大学）、森陽子（佐賀大学）が行いました。

八代市立博物館未来の森ミュージアム　〒866-0863 熊本県八代市西松江城町12-35 TEL0965-34-5555